

## 内的経験の発露としての「叫び」の言語起源論的考察

—ドイツ語と日本語を比較しながら—

竹内 義晴

### 1. 序論：身体を持って環境に生きる私たちにとっての進化論

チャールズ・ダーウィン(1809-1882)の進化論の衝撃はもちろん、キリスト教の考え方とそれに基づく人間の優越感を根底から揺るがした、という文化思想史上のものにとどまるものではない。『種の起源』の出版(1859)から150年以上にもなろうとする現代(2016)においてもなお、神に似せて創造された人間が実は(神に似ていなくて、「下等で劣った」)サルなどに似た動物を祖先に持っている、という「お話」に自尊心を傷つけられている人たちがいる。その人たちの国では進化論を学校教育において締め出すということが未だに生々しい政治論争の課題なのである。しかし、過去の戦争での侵略や加害を認めようとし、ない人物を国のリーダーに選んでいる人々が、よその社会での科学をめぐる状況のアナクロニズムを笑うとしたら、それは「口くそ鼻くそを笑う」というようなものだろう。進化論の衝撃というのはむしろ生物に関係する私たちの科学の根底が覆されたことにある。

生物が、例えば人間がサルのような存在から進化を遂げてきたという「お話」が問題ではない。生物は肉体を持っていて、その理由で、環境に適応して生きのびなくてはならず、そういうわけで、それぞれの環境で生きのびるのに適した身体を持った動物だけが生き残ってきた。この生物の存在を規定する根本原理が提案されたことこそが重要なのである。

この原理が広範に働いた結果として、何らかの原始的な生物を祖先としてそれぞれの生物が進化の過程を経て出来上がっているという物語がある。そして、この物語は、生物学的分類をする上での重要な手がかりであり、私たちの自己存在についての認識もこの物語の上に成り立っている。しかし、そうであっても、この物語についての文化思想史における争い自体は、私たちが個人や集団としてその物語を好きか嫌いかという問題にかかわるものにすぎない。

生物に関係する科学の守備範囲は広く、生物学や医学・環境科学だけのことにとどまらない。人文科学の大部分、そして言語研究の対象もちろん、人間という動物がやっていることなのであり、人間という動物の本性によって成り立っていることなのであるから、これらの研究は生物に関係する科学なのである。青年文法学派から構造主義まで、近現代の言語学は、言語記号だけを観察して、その成り立ち(構造)やその時間軸上の変化の法則性をより精緻に記述する仕事をしてきた。しかし、進化論による科学のパラダイムの変

化を真摯に受け止めるならば、言語研究はもはや、記号としての言語の形式の問題をいじくりまわしているだけではない。

言語は、生物としての人間の進化の結果として、脳の仕組みの働きとして現れ出るものである。このことをノーム・チョムスキーは指摘して、生成文法による 20 世紀の言語学革命を起こした。言語学は生物学の一部門であるということが書いてあったのは、1965 年の『文法理論の諸相』だった（1957 年の『統語構造』ではマルコフプロセスに基づく統語処理システムの考えに対して、統語規則を適用する文生成の計算メカニズムを提案することが主題だった）。言語とは脳が進化した結果として成り立っている、統語構造を作り出す能力によるものなのだ、という考えを生成文法は提示したのだった。

統語構造にかかわる脳の働きを中心に据えた生成文法の考えを批判し、意味の問題こそが言語の核心にあると主張したのが生成意味論であった。そして生成意味論の議論を発展させる形で、人間という主体が環境とインタラクトすることこそが認知という活動であり、この認知という働きこそが言語の基盤となっているのだと主張したのが現代の認知言語学である。私たち人間という認知主体が環境の中で生き、環境と対峙する中でこそ意味は生まれ出る。言語というのは人間と環境とのエコロジカルな関係性から立ち出たのだと明確に主張したのは、ジョンソンとレイコフ（1999）の「肉中の哲学」であった。ここに立ち至って、ようやく言語研究は身体の問題を正面からとらえ、進化論によって切り開かれた、現代に通用する科学のパラダイムに対応するようになってきたのだと言える。

1859 年にダーウィンが『種の起源』を出版してから、チョムスキー（1965）までに百年以上、レイコフ&ジョンソンまでにさらに 35 年で合計 135 年、歴史において科学の革命・変化が受け入れられ、定着するのには、兵器やコンピュータ、携帯電話の革新が広まるのにくらべると、なんと時間がかかるものなのだろうか。

ともあれ、このようにして私たちの言葉についての科学は、とっくに研究の基盤に据えられていなくてはならないはずの「進化論にもとづく共通のパラダイム」によりやくにしてたどり着いた。それは、

私たちが主体として、肉で出来ている身体を持って、環境に対峙しているからこそ、競争を含めた生存環境の過酷さを生き延びることを強いられている。

という生物存在についての認識なのである。

私はこの論考では、以上の認識のもとに、言語のもっとも原始的な構成要素である「叫び」という現象を手掛かりに、言語の成り立ちについての基本を考えなおしてみたい。ただし、筆者は日本語の母語話者としてドイツ語学の研究に携わる仕事をしていて、扱える言語については制約がある。ここでは、ドイツ語と日本語の比較をベースに議論を進めることにしたい。音声学的なことがらについては、主にドイツ語の関係に話題を絞る。

## 2. 発声に至る身体・肉体上の制約

### 2.1. 発声の前提

私たちの身体は、筋肉・皮膚・脂肪や骨格、内臓組織などによってできあがっている。そのような私たちの身体には、様々な環境における生物としての制約が課せられているが、本論では以下の制約に注目して議論を進めたい。

- A 私たちの身体はエネルギーの供給によって維持されるものであり、エネルギーを過剰に浪費するような運動を避けなければいけない。
- B 私たちの身体はある程度の柔軟さを備えてはいるが固さを持った物質でできあがっている。私たちの身体には、その基本的な形状があり、質的にも量的にもその変化の可能性は限られている。

私たちの発声は、大攪みに説明すると、以下のように定義される：

胸郭といわれる空間に格納されている肺に蓄えられた呼気が筋肉の収縮によって気道から排出される。この空気移動の持つ運動エネルギーは声帯のスリット、口腔や鼻腔を通過する際に様々な振動エネルギーに変化し、さらに口腔や鼻腔における共鳴による振動の質変化を起こしながら、口や鼻の開口部などから身体外の空気に伝播する。

外肋間筋は収縮することによって肋骨を引き上げる。内肋間筋は収縮することによって、逆に肋骨を引き下げる。肋骨が引き上げられることによって、胸郭の空間は拡大する。肋骨が引き下げられることによって、胸郭の空間は縮小する。胸郭というのは、横隔膜という筋肉でできた伸縮する膜が肋骨に囲まれた筒型の空間の下部を胃や腸などの収められた腹腔と隔てることによって作られる空間である。横隔膜の位置は腹筋の緊張などによって生じている腹圧によって胸郭側に押し上げられているのが基本である。この時に肋骨も引き下げられ、胸郭の水平面断面積も小さくなっていると、胸郭の中にある肺の容積も最小のものとなる。他方、肋骨が引き上げられると、胸郭の水平面断面積が大きくなる。

胸郭の水平面断面積を大きくする位置で肋骨が固定された状態で、横隔膜が収縮すると、横隔膜は、肋骨で構成される筒の下部を支点に引っ張られる。その結果、腹圧によって胸郭の内側に押し上げられてお椀を伏せたようになっていた形状の円弧のカーブが緩やかになり、胸郭の容積は拡張され、肺の容積も拡張され、外気が肺の中に取り込まれる。次に、肋骨が引き下げられ、胸郭の水平横断面積が小さくなり、腹圧が高められるとともに横隔膜が緩み、横隔膜面が上昇し、胸郭の容積が縮小され、肺の容積が小さくなると、肺の中にたまった呼気が吐き出される。私たちはこのような体の使い方をほとんど意識することができないが、呼吸をするというのはこのように身体が働くということなのである。

胸郭に格納された肺は、発声のために進化した器官ではなく、その進化上の基本的な役割は、身体外の酸素を取り込み、身体でエネルギーを作るために消費された酸素を二酸化炭素として排出することにある。そのため、肺は、外と内との肋間筋や横隔膜、腹筋などの働きにより、恒常的に拡張・収縮を繰り返して、エネルギーを大量に消費するときには大きく激しくなるが、基本的には穏やかな拡張・収縮運動をしている。

気道を通る呼吸は鼻腔・口腔に排出される前に喉頭という軟骨でできた小さな空間を通過する。声帯はこの空間の両側に喉頭の軟骨組織を支えにして張られている粘膜に覆われた筋肉質の膜であり、声門という空気の通り道を形成する。声帯が張られることによって、二枚の声帯の間の隙間は狭まり、呼吸が通り抜けるスリットを形成する。呼吸は、このスリットを通り抜ける際に声帯を振動させ、空気振動を生み出す。

臓器としての肺は基本的に呼吸の機能のために進化したのであり、呼吸の通り道がスリットによって狭められていると、呼吸という肺の本来の働きが妨げられてしまう。また声帯を張るためには筋肉を働かせなくてはならず、余計なエネルギーが消費されてしまう。この二つの理由によって声帯は緩められていて、声門は開かれているのが、通常の基本的な状態である。

口腔は食餌のために進化した器官であり、食道と気管へとつながっている。咀嚼した食べ物を飲み込む際には喉頭が上前方に移動し、喉頭蓋といわれる蓋上の組織が後方に倒れ、咀嚼されて流動物状になっている食物が気管や肺への流入することを防ぐようになっている。なぜなら、口腔内で咀嚼された、様々な細菌の混ざりこんだ流動物が器官をとおって肺に流れ込むことは肺炎などの病気を引き起こし、生命を維持することについての危険を生じさせるからである（人間以外の動物ではそもそも咽頭の位置が高く、口腔の咀嚼物が気道を通して流れ込むことが起こりにくくできている）。口腔空間は、飲食・咀嚼のため開閉される以外は、上下の唇が合わされる形で通常は閉じられていて、舌と口蓋・歯茎の間の空間は狭められ、上下の歯もまた軽く合わされている。

他方、鼻腔は呼吸のために進化した器官であり、気道上部で気道とつながっている。口腔もまた気道上部で気道につながっていて、鼻腔と口腔はこの部分でつながっている。咀嚼物などが鼻腔に入らないよう、咀嚼・嚥下時には口腔と鼻腔のつながりは口蓋帆が上がることで遮断される。また鼻腔はその構造上、自力で出口において閉じられることはない。

## 2.2. 発声・調音器官における音の発生から発声へ

### 2.2.1. 発声・調音器官における音の発生

例えば、激しい運動などによって大量にエネルギーが消費されるばあい、必要な酸素の取り込みと二酸化炭素の排出のため呼吸が激しくなり、肺から気管を通じて排出される呼吸は鼻腔を通じてだけでなく、口腔を通じても排出されなくてはならない。気管から口腔に通じる出口から唇に至る空間が最大限に開かれることによって、激しい呼吸はより容易

になされることになる。このため、舌と口蓋・歯茎の間の空間は大きく開かれ、上下の歯、上下の唇の間の空間も大きく開かれる。この際、気管を通して排出される激しい呼気はその出口にあたる咽喉や軟口蓋において排気管の形状の変化に対応して、管の内面と摩擦を引き起こし、[h]のような声門摩擦音、[x]のような軟口蓋摩擦音を生じさせる。

激しい呼吸は、外的な要因によって、そのもっとも効率的な遂行を妨害されることがある。例えば、苦痛や激しい運動の遂行のために、表情が歪められることがある。表情筋を収縮させたり、歯を食いしばらなくてはならなかったりするときには、連動して口唇や口腔の形状が歪められ、最大限の空間の広がりを保てなくなるばかりではなく極端に狭められることもある。この場合には[s]・[ç]・[ʃ]・[f]などのそり舌・硬口蓋・歯茎・歯唇摩擦音が生まれる。

外部からの衝撃や、せき込みや口腔内の異物の掃出しのような内的な要因によって、様々な場所で呼気がせき止められ、爆発することで破裂音が生まれる。[k]・[t]・[p]などがこれに当たり、それぞれの調音に使われる器官にしたがって、軟口蓋・歯茎・両唇破裂音と呼ばれる（後述する破裂鼻音に対して破裂口音と呼ばれることもある）。

### 2.2.2. 発声へ

声帯は、鳴き声を発する哺乳類に備わっていて、声帯を通る呼気に振動を生じさせ、口腔・鼻腔などに共鳴させ、音声を発することができる。音声を発するかどうかは言語音に限らず、生物の主体性によってコントロールすることができる。絶えず鳴き声を発しているのは、捕食者や被捕食者、そして競争相手や敵に居場所を知られてしまうし、何よりもエネルギーの浪費であり、声帯を疲弊させて、炎症を起こすなどの危険を招くことにもなりかねない。この理由により、哺乳類は基本的に必要な場合に限って鳴き声を発する。

犬にしても猫にしても、他者に攻撃を加える寸前であるという威嚇の声をあげて、退散を迫るし、キツネザルの鳴き声が伝えたい危機の種類によって鳴き分けられることなどが知られている（フランス・ドゥ・ヴァール 1996、2005）。自己、または仲間に攻撃を与えるかもしれない、見慣れない個体の接近に対する警戒の鳴き声を上げるのは犬に限らないし、鳴き交わすことによって相互の位置を確認する、という犬やオオカミの遠吠えの働きもよく知られている。

私たち人間もまた、任意に声帯の振動を引き起こし、声を発することができる。呼気の出口である両唇で構成される開口部を広く構え、口蓋帆を上げることによって鼻腔への呼気を遮断する。咽頭から口腔につながる軟口蓋の舌、そして硬口蓋の下にある舌の上面の高さを下げることによって、呼気が通過する咽頭から外部空間への空間全体を広がりのある、比較的単純な、丸みを帯びた筒状の構造にすることができる。このことが効率良い呼気の排出を可能とし、声帯の振動による空気の振動に高いエネルギーを与えることを可能にする。そしてこの空間に声帯からもたらされた振動が共鳴することで、いくつかの周波

数帯の音波の比較的単純な組み合わせのパターン（フォルマント構造）をもたせることができる。（このとき、口蓋帆によって鼻腔への連絡が遮断されていないと、口腔と鼻腔の二つの空間の共鳴が干渉し、鼻音と口音が混在する複雑でインパクトの弱い音が生じてしまうのである。）このことによって母音の[a]が生じるのである。この母音は強さと単純さに基づくインパクトを備えている。

[a]音よりも両唇の開きの程度を、口をすぼめ、やや狭めることにより母音の[o]がうまれる。この時、口をすぼめる構えの関係で、口腔の奥、口蓋垂の近くで下がっていた舌の上面はあげられる。しかし、軟口蓋、硬口蓋の下舌の高さは低いままであり、声帯の振動が共鳴する空間は比較的単純な丸みを帯びた形状をとどめている。母音の[o]よりも両唇の開きの度合いをさらに細く狭められることにより母音[u]に変化する。この時、口腔の奥の舌の上面はさらにあげられるが、軟口蓋、硬口蓋の下舌の高さは低いままであり、ここでも声帯の振動が共鳴する空間は比較的単純な丸みを帯びた形状をとどめている。開口部の狭められることと、口腔の奥の舌の上面があげられることによって、共鳴音は段階的にもった感じを帯びてきて、その意味で明快・単純な感じが少しずつ失われることになる。

さらに、[a]、[o]、[u]音では軟口蓋・硬口蓋の下舌の上面が盛り上がってなくて、口腔の空間が広く取られているが、舌の上面の位置を高くセットすることによって、[a]、[o]、[u]の母音から、[ɛ]（筆記表記は>>ä<<）、[ø]（筆記表記は>>ö<<）、[y]（筆記表記は>>ü<<）の Umlaut（変母音）と呼ばれる母音が生じる。[a]、[o]、[u]音では口腔が丸みを帯びた筒状の空間をなしていたのに対して、[ɛ]、[ø]、[y]音では硬口蓋から歯頸部にかけての舌の上面がもち上げられることによって、口腔の出口の空間が上下に押しつぶされ、音の響きの構造は閉じられた空間に共鳴する音に加わり複雑さを増すことになる。この三つの音の違いは、両唇による開口部の構えによる口腔空間の形状の違いによるものである。

[a]、[o]、[u]音の開口部の構えをそのままに、[e]や[i]の発音をさせて、舌の上面を硬口蓋から歯茎にかけての面に近づける（このことについては次項で触れる）というのが、伝統的なドイツ語のウムラウトの説明や練習の仕方である。しかし、上の考察を踏まえると、逆転の発想で、[e]や[i]の発音をしながら、両唇による開口部の構えを非円唇開口から、円唇のやや狭い開口、そして円唇の狭い開口に変化させることで、ウムラウト音の発音の仕組みについての分かりを豊かにすることも可能である。

激しい運動やストレスのための緊張や頑張りや口腔空間にゆがみを生じさせる。たとえば歯を食いしばって両唇の付け根である両端が引っ張られると、開口部もまた両側方にひっぱられ、横方向の非円唇形状を形成する。このとき、舌の上面は、硬口蓋から歯茎にかけての面に近づかざるをえない。このようなゆがんだ空間での共鳴の結果、[i]の母音が生まれる。[i]の母音におけるほど、両唇の橋がつよく横方向に引っ張られない場合は、やはり舌の上面は、硬口蓋から歯茎にかけての面に近づかざるをえないのであるが、別の空間形状における共鳴の結果、[e]音が生まれる。これらの母音は、比較的単純な空間における

共鳴によって生ずる[a]、[o]、[u]音と比べると、緊張感のある響きを持つ。

口蓋帆を引き上げずに、口腔から鼻腔への連絡を遮断せずに、両唇の間、または硬口蓋と舌の間を閉じることで口腔から外部への呼気の流れがせき止められると、口腔のせき止められた内側と鼻腔空間における共鳴によって鼻腔での共鳴を伴った独特の響きが生ずる。この鼻腔共鳴の響きを伴いながら両唇や歯茎と舌による口腔の閉鎖が破裂的に開放されると、破裂鼻音の[m]と[n]が生じる。

舌先が歯茎に当たった状態で舌の両側が空いた状態の口腔に共鳴することによって、側音の[l]が生じる。この音声は声帯から発生した空気の振動が舌の位置との関係で形成される特殊な口腔の形状での共鳴によって生ずる点で母音のようなものである。日本語の「ウ」の発音を上あごに舌をつけてするのに近いが、母音が直後に続く場合には、舌が歯茎から離れる瞬間のフラップ感がある。そのような理由で、私たち日本語の話者には、[l]音が[r]音に似ていると感じられるようである。

軟口蓋や後舌部を含む口蓋垂付近で声帯からの振動エネルギーを持つ呼気が粘膜と強く摩擦し、粘膜や口蓋垂の振動を引き起こすと、有声口蓋垂摩擦音の[R]が発せられる。これは軟口蓋摩擦音の[x]と似た音であるが、軟組織のフラップ音が特徴である。

ここまでが人間の発声器官から生ずる音、そして（ドイツ語の）言語音が生み出される身体的なメカニズムの概略の説明である。

### 3. 内的経験としての感覚から情動への連続性

私たちは身体を持った動物である。私たちは身体を基盤に生命を持った存在であり、私たちはこの生命を次の世代の身体につないでいかなければいけない。そのような私たちは、常時、傷つき・病気になり・死ぬ、そして絶滅して生命を次代に引き継げない、というリスクを背負っている。このリスクを避け、または生命の活力を維持・向上させるため、私たちには痛みや寒さ、吐き気などの不快さ、そして、食（美味・満腹）、健康や性関係（美しさや快楽）などの心地よさ（快）の感覚が備わっている。

そして、このような身体を守るための感覚は、喜び、楽しさ、満足感、悲しみ、不安、怒り、恐れなどの情動に連続的につながっている。例えば部屋の気温が下がり、体温を下げてしまう危険があるときに、それを気温の変化として感じることもできて、嫌だ、寒いと感じられない恒温動物の個体は、簡単に凍え死んでしまうだろう。私たちは嫌な寒さを避けるために、厚着をしたり、暖房を入れたり、または他の暖かい環境に移動しなければならない。感覚と情動はリンクしていなければ、感覚器官が備わっていることが意味をもたなくなってしまう。

このようなことを踏まえ、本論では、この連続性を持った内的経験のことを情動と呼ぶことにする。情動は感覚との連続性を持つ内的経験であり、外から見えなように思われ

るかもしれないが、実はこれを隠すことの方が難しい。情動が身体を通じて外から見えやすいのには進化的な理由がある。

喜びは表現されて外から見えなければ、喜びの原因（例えば食べ物をもらうこと・給餌）を引き起こした他者に、自分が喜びを引き起こしたことが理解されない。乳児の笑顔をみることが授乳する母親にとって麻薬のようなものであり、お乳を吸って喜ぶ乳児を見た母親には、乳児の喜びが伝染する。実際に他者の喜びが自分にうつるという形で直接に自分の喜びを引き起こすわけではない。他者の喜びの表現を見る経験が喜びの経験を引き起こし、自分から進んで喜んで乳児に授乳をおこなう気持ちを掻き立てる。

このようにして、私たちは喜びを共有するために、仲間を応援したり、勝利や収穫のお祭りをしたりする動物として進化してきた。協働することは、私たちに進化的に仕組まれた喜びなのである。

乱暴な他者が私に対して怒っている場合、その怒りが直接に私の恐怖を引き起こすわけではない。表現されなければ怒りは「伝わら」ないのだ。他者の怒りを見ることで私の恐怖が引き起こされる。これは、他者の怒りを見るという神経系の働きと恐れるという神経の働きが連動しているという点で、因果関係である。怒っている他者に恐怖を感じた私は、その他者から遠ざかるだろう。その乱暴な他者に怒りの内的経験を引き起こす何かをしたかもしれない私がある他者から遠ざかり、視野から消えることで、彼の怒りがさらに掻き立てられる可能性は減少するだろう。または、私が去ることで少なくとも彼の溜飲は下がるかもしれないのだ。

私の恐怖は見られることで、他者に私に対する優位を認識させ、社会生活における力関係に悪い影響を及ぼすに違いない。それなのにどうして恐怖は表情や姿勢、そして叫びに現れてしまうようにできているのだろうか。恐怖を隠すことは意識レベルでの努力によってなんとか成し遂げられるかもしれないが、しかし、それを実行するのはなかなか難しいことでもある。

恐怖が隠しにくい情動であることにはやはり理由があるのだろう。私の恐怖している様子をみた仲間は、私を助けに駆けつけてきてくれる。怒って私に恐怖を引き起こした相手だって、恐怖する私を見たら、怒りを和らげることだってある。このようなことを考えると、私たちの社会生活の一面は戦いかもしれないが、それよりも何よりも、もう一つの重要な側面が共感や助け合いをベースにしていることが推測できる。

ド・ヴァール (de Waal) 2009 は『共感の時代』において、私たちがヒトとして進化してきたことのベースは共感であることを示した。様々な情動を経験している個々の主体の内的な経験が外部に見えるように進化したことで、私たちはますます社会生活を営む動物になった。私たちは他者が外部にもらす情動を自己に投影し、その上で、連帯したり、敵対したり、助け合ったり、競争したり、喧嘩をしかけたり、相互に働きかけ、影響を与え合うことで、結果として自分たちの生存を有利にする行動様式を進化させてきたのである。



以上述べてきたように、音声を発するメカニズムは、私たちの身体の仕組みに基づいて働くようにできている。そして、私たちの内的経験としての情動は、基本的な外部に示されることで、社会的動物である私たちの存在を支えているのである。このことを踏まえて、以下ではドイツ語の叫びを中心に、日本語の叫びと比較しながら、叫びがどのように言語に近い性格をおびるようになってきたのかについて、私の議論を展開していきたい。

#### 4. 内的経験としての情動と身体、発声

情動は内的体験であり、外世界に対応する感覚と連続的な性質を持っていて、古い脳の働きに依存している。だから、情動が内的体験であるとしても、情動は身体的体験でもある。私たちの旧脳の働きは身体と直結しているのである。私たちの情動は旧脳の神経系の興奮パターンである。そして情動的に興奮すると、脳の活動と共に身体の活動もそれに対応して活発になる。脳を含めた身体の活動が活発になると、エネルギーが大量に消費され、酸素の取り込みが必要になり、活発に呼吸が行われることになる。

##### 4.1. 身体につながる感覚的情動の音声による外化

###### 4.1.1. 寒さと震えの音声による外化

私たちの身体は、寒いときに震える。震えによって、骨格筋が使われ、熱が発せられ、その結果として身体が温まる。このように、震えというのは、寒さによって身体が冷え、調子を崩すことを防ぐ機能を持った生理現象であると理解されている。ここで必要とされるのは、力学的エネルギーではなく、熱学的エネルギーであり、それを得るためには、筋肉を強く緊張させ続けるのではなく、身体の可動部分が反復的に動くように、つまり震えるように伸縮させることが理にかなっている。震えでは、筋肉を強く収縮させることはなく、継続して運動が続けられ、疲労によるダメージも少ないだろう。発声に関係する首から頭部にかけての震えであれば、頸椎を軸に頭部が左右に細かく回旋すると顎の骨が細かく上下に動かされるものが、脳に過度の振動を与えずにすむ「良い」震え方であろう。

寒いことから、口は大きく開けない方が、熱が逃げるのを防ぐのには良い。寒いという事態に感嘆の声をだすにしても>>oh<<か>>uh<<であって、>>ah<<とってしまつては、大切な熱が体外に放出されてしまう。これは日本語でもドイツ語でもそうである。しかし、震えることでもエネルギーが消費されるのであるし、呼吸は多少激しくなり、呼気が吐き出されることは必要である。頸部は振動を支えるために軽い緊張が維持されているので、両唇の開きの度合いの少ない、軽い声帯の震えを伴う、[u]のような音声は自然に発せられるだろう。頭を小刻みに左右に回旋させながら、[u]のような音声を発し続けることは、震え音である[r]音を発することと似ている。さらに、両唇の開きの度合いの少ない状態で、唇を支えている下あごが上下に震え、息が排出されることで[b]のような両唇破裂音が時々

混ざるのではないだろうか。

このような理由で、ドイツ語の話者が寒いときに震えながら発する音声は[brɪ]である。これは様々な言語でも同様であるだろうと推測され、日本語でも、寒いときには「ブルブルブル！」と言うのである。ドイツ語の寒さに凍えることを表わす動詞は>>frieren<<であるが、震え音や唇の使われる音が使われるという点では、身体的に動機づけられていると言えるのではないだろうか。寒いときには、(1)のような例文が思わず口から出るものであり、そのときずっと身体、そして頭部が小刻みに震えているのである。

- 1) <sup>?</sup>アーッ/オーッ/ウーッ、寒いッ...ブルル！
- 2) <sup>?</sup>Ah/Oh/Uh, es friert mich ... brr!  
(<sup>?</sup>アーッ、オーッ、ウーッ、寒いッ...ブルル！)

#### 4.1.2. 吐き気・むかつきの音声による外化

日本語社会の構成員は、吐き気・むかつきを言語音で提示してくれと問われたら、「オエッ」と答えるだろう。

- 3) むかつくーっ ... オエッ！

ドイツ語にも>>ekeln<<(吐く)という動詞がある。この動詞を手掛かりに吐く行為に伴う音声表現を作るとしたら、>>ek<<または>>ehk<<となりそうである。人間の基本的な身体構造や不快なものを体内に取り込んだ時の反応の仕方は私たちに生得的なものだろうから、そういう意味で>>ek<<が日本語の「オエッ」と似ていることは何の不思議でもない。しかし、この>>ek<<または>>ehk<<というオノマトペは現代のドイツ語には残っていないようである。昔にはおそらくは>>chk<<のような擬音表現があったのであろうが、後述するように、ドイツ語とこの言葉を使う社会・文化には、このような音声を直接のオノマトペにすることを嫌う何かがあるのかもしれない。ドイツ語の吐き気については、>>ihh<<とか>>pfui<<、>>buh<<、>>bah<<、>>bäh<<のような表現があるという反論がもちろん可能であるが、この点については、4.2.2の「怒る」についての項目で議論する。

#### 4.1.3. 痛さの音声による外化から呻き・喘ぎの音声による外化へ

日本語では、痛いときには「アーッ！」などと叫ぶ。痛さをこらえるときには「ウーン」、「イテーッ！」と呻き、痛さに耐えきれず、こらえることができないときには、「ハッ、ハッ」、「ヒッ、ヒッ」と喘ぐ。このことについては、人間であればどの社会においても、多かれ少なかれ一緒なのだろう。

ドイツ語のこの領域での自然発声表現は、>>au<<、>>aua<<と>>au au au<<、>>aua aua

aua<<などの表現や、>>Oh weh!<<、>>es tut mir weh<<などの表現である。またドイツ語では、呻くことについては>>stöhnen<<、喘ぐことについては>>ächzen<<のような動詞表現が対応していて、前者では、円唇前舌中央母音[ø]に歯茎鼻音[n]が連続し、音節が閉じられる点で、日本語の「ウン」と似たようにうめき声に動機づけられている。こらえるためには身体は緊張を強いられ、呼吸を全開で吐き出すわけにはいかない。呼吸の通路は狭められ、または閉じられなくてはいけないのだ。また、後者では、高母音・狭母音[e]と硬口蓋摩擦音[ç]が組み合わされている点で、「ヒッ、ヒッ」と似たように喘ぎ音に動機づけられている。痛みをこらえるために身体を緊張させるのにはたくさんの酸素を取り込む必要がある。しかし、リラックスしていないのだから、大きく呼吸を排出・吸入するわけにもいかない。妥協として、小刻みに激しく排気・吸気を繰り返すことになるのである。

日本語でそうであるように、痛みをこらえようとするのではない場合、/a:/という長母音が痛みについての叫びとして基本的なものであるように思われる。傷などによる強い痛みの感覚は、少なくとも受傷の直後は、強いまま継続する激しいものであり、その感覚は強く筋肉の緊張を強い、呼吸は強く排出される必要がある。そして、そのために最も自然な口腔の形は、咽頭から軟口蓋に至る口腔の天井の下にある舌の上面が、喉の奥が見えるほど低い位置を保って大きな呼吸の通路を保証するものである。/a/音を調音するのにはまさにそのような口腔の構えが適している。そして、出せる呼吸が尽きる以外には、発声を弱めるような契機は存在しないので、この叫びは、呼吸が尽きるまで、弱化したり、下降調に転じたりすることはない。これが恐らくは、自然な痛みに対応する叫びなのである。

ところで、ドイツ語では痛みの表現が>>ah<<ではなく>>au<<になる。このことには上で触れたような、ある種の動機づけが働いているように思われる。/u/音は/a/音と違って単純に呼吸を効率よく外界に放出するのに適した音ではない。痛さというものを意識して、それを意志の力で抑え込もうとする「呻き」に/u/音が使われる。口唇を丸め、狭めることで、本来なら全開で排出すべき呼吸の勢いが絞られる。これが、痛みに伴う情動の発露を抑え込むという心の働きと類似していて、そのメタファーとして働くのだと説明できるのではないだろうか。

ではなぜドイツ語では、痛みは、単純に>>ah<<と外に出さずに、出しかけたものを>>au<<と抑え込もうとするのか、そこにはおそらく、自と他の関係において、簡単に自己の弱みを他者に見せないような、文化に特有の心のもち方が関係してくるのではないだろうか。

## 4.2. 感覚によりも心により近い情動とその言語化

### 4.2.1. 泣く

人間と同様に象が涙を流すこともよく知られている (Masson & McCarthy 1996)。そして人間は声をあげて泣く。泣くことは、笑いと似ていて、発作的な性質を持っている。だから、泣くことを意識的に始めたり、止めたりはできない。泣くことは、多くの社会におけ

るのと同様に、ドイツの社会でも、特に男性にとってふさわしいものではなく、子供や女性に許されるものであるとみなされることが多い。しかし、泣くということは、痛みや寒さのような感覚とは異なり、何らかの形で心が強く働くこと、ここでは、悲しみや絶望を抱えること、との関係で生ずることである。

日本社会との比較で言えば、後述するように、日本の社会では男性が泣くことについての受け止められ方はちょっと複雑である。男が泣くことが『ふさわしくない』ととられるのが普通であるという点では、ドイツと同様であるが、しかし、他方では『男泣き』というような、男が泣くことを肯定的に受け入れる側面もある。

悲しさは、基本的に、愛する者の喪失や目的がかなえられないことに起因する情動である。泣くことはこの悲しさによって引き起こされる発作的な行動である。日本語では泣き声を、「あーん」とか「えーん」のように聞きなす。ただし、このような日本語における鳴き声の聞きなしは、幼児や小児にしか見られない泣きに当てはまるものである。だから、例えば 1997 年にある大きな証券会社が経営破綻して、社長が記者会見の場で、そのような泣きっぷりを見せた時には、日本では大人があのような無防備・手放しの泣き方を公衆の面前で出来るのかと、欧米のメディアが驚いて報道した。そして、日本の社会では、肯定的にも否定的にも様々に評価された。しかし、大人が泣く場合は、日本においても、たいていは「しくしく」、「めそめそ」となるのであって、おおっぴらに「あーん」とか「えーん」とは泣かないのである。

「あーん」とか「えーん」では、悲しみの情動の激しさで自己のコントロールができなくなり、発作的に呼吸が大きく排出され、それに伴い、開口の度合いが大きく母音が伸ばされて発声されている。他方、「しくしく」、「めそめそ」では、大人が「あーん」とか「えーん」と聞きなされる発作的な発声が起きてしまうことを抑制し、押し殺す努力をするのだけれど、そのかいもなく漏れてしまう泣き声である。そのようなことに動機づけられ、この泣き声は後部歯茎や歯茎と舌の間の間隔を狭め、呼吸の排出を抑える無声摩擦音[j]、[s]や、口からの排気の出口を両唇で止めてしまう両唇鼻音[m]、軟口蓋でいったん呼吸を止める無声破裂音[k]と、開口度が狭めの母音[i]、[u]、[o]、[e]を組み合わせられた音声によって構成されている。さらには、この泣き声は小刻みに、身を震わせながら発する音声であるので、二つの音節の組み合わせが二度繰り返される構造をとっている。

ところでドイツ語には泣き声を直接に表す語彙が見当たらない。>>weinen<<などの動詞があるのだから、ドイツ人には悲しいことがなく、泣くことがないのではない。泣く時に声をあげないわけでもない。何年前に私は、ドイツ語には日本語の「うらみ」に相当する語彙が存在しないことについて、ドイツ語を話す人たちの作る文化・社会との関係性において論じたことがある（竹内 2012）。日本語の「うらみ」は、自分の経験しているつらさ・苦しみを与えた他者に対する怒りや復讐の念ではない。自分の経験しているつらさ・苦しみを他者が共有してくれるはずだ、分かってくれるはずだ、という前提を持っていて、

それをしてくれないことに悲しみを抱き、さらにつらいと思うのである。

そのような心の働きは、他者に自分の弱みを晒し、それを分かってくれるはずであるという、確信のもとに機能するものだろう。他方、他者に簡単に弱みを見せるべきではない、自分の痛みは自分で耐え、悲しみも自分で乗り越えなくてはいけないということが基本であることを個人に要求するというのが、例えば「個人主義」というレッテルの良く似合うドイツの社会なのかもしれない。

たぶんこのような心の働きと関連して、ドイツ語を話す文化において、泣き声や、呻き、喘ぎの音声に関心が払われずに、または、関心を払うことを避け、泣き声に言語音を割り当てて聞きなすという意味でのオノマトペが見当たらないという歴史を作ってきたのだろうと思われる。しかし、この問題を深く追及することは、本稿の直接の目的から離れるので、今後の宿題としたい。

#### 4.2.2. 怒る

##### 4.2.2.1. 不快さに対して怒る

4.1.2の「吐き気・むかつきの音声化」の項で、ドイツ語には、吐き気に対応するオノマトペとしての言語表現がないという議論をしたばかりである。しかし、>>ihh<<とか>>pfui<<、>>buh<<、>>bah<<、>>bäh<<という表現には、ドイツ語の辞書などを見ると吐き気(Ekel)の表現であるという説明がしてある。(3)の日本語の例文(再掲)と(4a-c)のドイツ語の例文を比べてみよう。

3) むかつくーッ ... オエッ!

4a) Ihh, Regenwürmer mag ich nicht!

(イーッ、ミミズは嫌いです。)

b) Pfui, Teufel!

(フィッ、化け物め!)

c) Bäh, der stinkt ja!

(ベーッ、あいつは臭いなあ!)

日本語の「オエッ」は嘔吐する身体動作に由来するのだろう。それに対してドイツ語の>>ihh<<には菌を食いしばって吐き気に抵抗しているような意志が感じられる。>>pfui<<も吐き気を吹き飛ばすおまじないのようであって、唾を飛ばす唇と勢いのある呼気の排出に動機づけられているのだろうとかがわかる。>>buh<<、>>bah<<、>>bäh<<はそれぞれに怒りの表現であるが、吐き気を引き起こす何者かに向かって怒りを表しているようである。この表現の違いはどこから来るのだろう。

前項でもふれたが、私はかつて、ドイツのお化け(Geister)が>>buh<<と言って登場するの

は、危害を与えた相手に対して怒りを表現しているのであって日本のお化けが表現していることと全く異なることをしているのだということを議論した（竹内 2012）。日本のお化けが「うらめしい」と言うのは、相手に自分のつらさを理解して反省することを求めているのであって怒りではないのである。日本語の「オエッ」だって、嫌悪を表わすのにも使われるのだが、その使われ方は、自分の気持ち悪い感覚を、他者も感じられること、共感が引き起こされることが動機づけになって定着したものなのだろう。怒りがベースの表現とは違うようなのである。

このような意味では、ドイツ語の吐き気・むかつきに対応する表現は、この感覚に直接対応するものなのではない。これらの表現は、原初的な身体表現に基づくのだろうけれども、その原初的な経験は、直接の吐き気ではなく、吐き気に対する怒りのような経験を基盤に派生したものなのである。これらのドイツ語の、吐き気に対応すると説明されるオノマトペは、実は吐き気ではなく、それに対して私たちの心に引き起こされる、別の情動を起源にしている。そして、その情動を持つためには、「吐き気」の経験は嫌悪の対象として、直接の経験レベルから引き上げられていなければならない。このような意味で、これらの >>ihh<<、>>pfi<<、>>buh<<、>>bah<<、>>bäh<<のような表現は、私たちの今日の言語に少しだけ近い性質を備えたものとも言えるのではないだろうか。（この点については、第5章で叫びが言語に進化する問題として、さらに議論するつもりである。）

#### 4.2.2.2. 攻撃的に、威圧して、見下げながら怒る

私たちは怒る。いやになるほど怒りっぽい動物である。怒りも発作的なものである点では、泣きや笑いと似ていて、意識によってコントロールできないところのある困った情動である。

前項 4.2.2.1.で議論したように、不快な経験に対して怒りという情動が引き起こされることがある。怒りは基本的に攻撃的情動であって誰かに向けられるものである。不愉快なことについても、私たちは「誰かがそれを引き起こしたのだ」と感じるようにできている面がある。だから怒りは向けられた誰かに気づかれなくてはならず、その主体を怖がらせなくてはならない。他者を怖がらせるためには、自分には力がある、ということを誇示するのが有効である。自分に力があることを示すためには、力を行使してみせるのが一番であり、怒ったボスチンパンジーや人間は暴力をふるったり、物を壊したり、牙をむいて怖い顔を見せたりする。

私たちの多くは、また、多くの場合、直接的な暴力を行使したり、ものを壊したりするのをさけようとする。しかし、暴力的でいずにはいられない心の動きの激しさをなんとかしなければならぬ。この乱暴な心持ちの捌け口を言語音に求めようとすれば、例えば >>ha<<を短く、下降調で激しく吐き出すように発音する表現になる。声門摩擦音[h]は息の擦れる音であり、激しく発音するときに、非常に激しい響きを提示する。また、低母音・

広母音[a]は、口腔空間の開きが大きく、音声に直接にエネルギーをもたせるのに適している。だから、この二つの音が組み合わされた>>ha<<の表現は、ドイツ語では何かの対象を低く評価し、そのことによって、その対象を擁護しようとする他者に対して怒り・攻撃する、または自己の優位性を誇ろうとするときに使われる。例えば(5a)のような例である。

5a) Ha, der wird staunen! (dudenonline)

(ハッー、奴はおどろくぜっ！)

5b) Ha, da kommt sie ja schon! (dudenonline)

(ハァッ、あの人たちがもう来ているよ！)

この例の>>ha<<は dudenonline では、勝利や優越感を表わす間投詞と説明されていて、喜びを表す(9)の例と同列に扱われているが、(5b)の>>ha<<は、短くても、決して吐き出すように発音してはいけないものだ。これは、短くても、上がってから緩やかに消えるように下がるメロディーを伴って発音されなければ、喜びのこもった間投詞にはなれず、この点で笑いの>>ha ha ha<<との連続性があるのだろう。オンライン辞典では発音も音声で公開されているので、発音例を参照すれば、発音記号だけではわからないこの違いを確認することができる。

(6)の例では、両唇破裂音[p]と長母音[a:]と組み合わせで>>pah<<という表現が、やはり吐き出されるように、下降調で発話される。両唇破裂音[p]が使われると、短母音[a]との組み合わせでは落ち着きが悪いようである。dudenonline では、この表現をさげすみの間投詞であると説明しているが、(5a)の叫びよりも両唇破裂音[p]が使われる分、自然発生的というよりも意図が加わって、表現が行われているように思われる。脳の働きを直接に観察して、このような表現の違いの解釈に役立てることが可能になる時代がやってくるのだろう。

6) Pah, diese Leute interessieren mich nicht! (dudenonline)

(パーッ、あんな奴らに興味はないわっ！)

#### 4.2.3. ため息をつく

私たちは、悲しみで心がふさがれるような時がある。そのようなとき、身体活動は低下し、呼吸活動による酸素の供給も欠乏しがちになる。私たちの身体は、酸素の供給を必要とし、知らず知らずのうちに深く息を吸い込んでいる。深く吸い込まれた息からは、酸素が体内に取り込まれ、二酸化排二酸化炭素が排出されるが、この息は肺の中にためておくことはできず、新しく酸素を取り込むために吐き出されなくてははいけない。

悲しみで打ちひしがれた私たちは、深く吸い込んだ息を吐き出すにしても、元気が出ないのだから、肺が大きく膨らんでいるうちは強く空気が排出されるだろう。しかし、排出

の進行とともに排出の勢いは弱まるのが自然である。

私たちが悲しい出来事によって受ける落胆は、強く心を動揺させるものもあれば、緩やかに気持ちを押しつぶすものもある。強い落胆に陥っている場合、息の吐かれ方は激しくなり、排気器官である口腔は広めに開けられるだろう。深く落胆している主体は、口を大きめに開ける元気もなく、吐く息も激しくなく、そのように大きく口を開ける必要もない。

7a) Haa(下降音調、[a]音はほとんど気音化される), das letzte Spiel haben wir verloren.

(は一つ、最後の試合なのに、負けてしまった！)

7b) Huu(下降音調、[u]音はほとんど気音化される), wie sollen wir die schwere Zeiten überleben.

(ふ一つ、この困難な状況をどう生きのびたらいいのだろう。)

このため息もまた、単に気持ちの発露としてだけ機能するのではない。このため息は、誰かに聞かれて、さらに社会的に有効に働くのである。(7a)では残念な気持ちがチームの仲間と共有されることによって、チームメートが「あなたは主将で、これまでよくリーダーシップをとってくれたのに…」と慰めてくれるかもしれない。または、「私たちは良いチームメートだった」と過去の楽しかった・厳しかった練習を振り返ってくれるかもしれない。(7b)では、困難な状況をともに生きのびなければいけない仲間と危機意識を共有し、遠い将来を見すえて励ましあうきっかけになるかもしれない。いずれにしてもため息は、他者に聞かれることによって、仲間の絆を高めてくれるかもしれないのである。

ため息をつくという動詞は、ドイツ語では>>seufzen<<であるが、ここにあげた自然発声表現と直接結びつくものではなさそうである。YouTube に>Warum seufzen wir?< (「どうして私たちはため息をつくのか」) という ARD (ドイツ公共放送連盟) の教養番組が公開されていて、この項で紹介したような、ため息の機能・働きについて分かりやすく簡単に紹介している ([https://www.youtube.com/watch?v=MT2gik58\\_Yo](https://www.youtube.com/watch?v=MT2gik58_Yo))。

#### 4.2.4. 笑う

ダーウィン 1872 は動物には笑いや泣きという感情に似た動作・表情がみられることを指摘しているが、現代社会に生きる私たちは、動物飼育員にくすぐられて笑っている長野市茶臼山動物園のチンパンジーの動画を YouTube で見ることができる([www.youtube.com/watch?v=dyxie\\_2jRYM](http://www.youtube.com/watch?v=dyxie_2jRYM))。このチンパンジーは声門摩擦音[h]の連続反復による喘ぎのような音声を発していて、くすぐったそうなうれしそうな表情が見て取られる。

##### 4.2.4.1. 笑い、結果として喜びを共有して笑う

笑いは発作的な活動であり、これを意識の働きで止めることは特に難しく、葬儀や儀式



などの厳粛さ・真面目さが求められる場で笑うことは社会的に好ましいことではなく、非難されることである。他方、笑いは、個人の性格の活発さ・明るさ・快活さを示すものとしてとらえられていて、特に男性については基本的に好ましいものとみなされる傾向がある。笑いは発作的な活動であるから、激しく反復的に排出された呼気が気道の出口である声門付近でリズムカルに強く擦れることによって、笑いという現象になるのだろう。

人間の笑いの基本的な音声連鎖は[ha,ha,ha]のようなものである。チンパンジーの笑いと同様に、呼気が横隔膜の痙攣的な連続反復収縮によって、呼気的大量排出に適している大開口低舌の口腔空間に激しく排出されるから、声門摩擦音の[h]で始まることが最も合理的なのだろう。人間の笑いの場合にはチンパンジーの笑いとは異なり、声帯が使用され、[h]音に低母音・広母音の[a]が続き、その音節[ha]が連続反復される。

実際の笑いにおいては時には声帯の使用が自由に選択できないことがあるとしても、声帯の使用は基本的には自分自身で選択できるものである。人間の笑いは、積極的に自身の内部体験を他者に見せようとする起源を持っているに違いない。獲物を他者と協力してとらえるのには、単独行動にはない注意力の集中や気配りなどの努力が必要である。その一方で、協働は狩りの成功率を高め、生存の可能性を著しく高めるだろう。協働が実現する一番の動機は、より多い利得の獲得とその共有、分かち合いであり、さらにはそのような良い結果を得たことを喜べることであり、最終的には、喜びを共有することをさらに喜び合えるということだろう。

例えば、乳幼児に授乳する母親は、たとえ出産の大仕事を成し遂げて、疲労困憊していて、身体を休める必要があり、眠くて仕方なくても、赤ちゃんがおっぱいを飲んで笑顔を見せるならば、赤ちゃんの喜びを自分も共有する喜びに突き動かされて、いそいそと、または仕方なく授乳の営為に励んでしまうのである。

#### 4.2.4.2. 喜びを共有し、結果として他者に誇るように笑う

共同で狩りをする利益が生存に優位に働くためには、喜びを共有している仲間との絆の強化、その喜びをもてなかった他者・他グループへの喜びの見せびらかし、そして、その優越感を仲間と共有することも重要な役割を果たす。笑いというものが、単に人間の快活で明るい気持ちと結びつくだけのものではなく、攻撃的・差別的な側面を持つことについては、例えば、Michael Billig（マイケル・ビリッグ）2005 が言及しているが、このことはプラトンやソクラテスの時代から議論されていることなのである。

笑う際に、声帯を震わせ母音を使うことは笑いの可聴範囲を拡大するし、社会動物としての人間の生活を堅固に構造化するのに大きく貢献し続けてきたのではないだろうか。この笑いは以下のような達成感や優越感のこもった喜びの場面の例文に適している：

8) はははっ、やり遂げましたね！

9) Ha, ha, ha, wir haben's endlich geschafft! Nicht ihr!

(はっ、はっ、はっ、とうとうおれたちはやり遂げたぜ！お前らじゃなくてな！)

この笑いを表現するドイツ語の動詞>>lachen<<には同じく[a]音とこの母音の調音と対応して軟口蓋で調音される無声軟口蓋摩擦音[x]が使われている。このことは、ドイツ語では、オノマトペが動詞表現に現れることがよく知られているが、この言語形式もまた笑いの身体動作に動機づけられたものだと言える。

#### 4.2.4.3. 後ろめたく、下品で攻撃的に笑う

この笑いは、場合によって高前舌非円唇母音[i]とともに構成され、[hi,hi,hi]のようなものになる。高前舌非円唇という口蓋空間の形状は、口蓋と舌の位置の間に狭いという点でも、唇が両脇に引っ張られ、開口部が細長くスリット上になるという点でも、呼気の大量排出に適しているとは言えない。この笑いは他者を軽蔑し、自分自身がそのような態度をとることの上品さもわきまえている、そのような場面で使われる。

この笑いはその意味で、[ha,ha,ha]に比べてより強い毒を持っているが、そのことが、ことさらに効率の良い呼気の排出には適していない口腔の形状をとることに現れている。低舌開口よりも高前舌非円唇口腔形状をとることにはより多く筋肉の緊張とエネルギーの投入が必要なのである。

[ha,ha,ha]によって生まれる仲間意識は、喜びは読み取られることによって共有され、自然発生的に成立するような性格のものだろう。それに対して、[hi,hi,hi]にはより強い働きがある。社会的動物である私たち人間は、笑いによって仲間の結束が成立することにも、またそれをあえて他者に見せることによって、自分たちの集団の優位を誇り、他者に対する攻撃性を示し、より強い仲間の結束が生まれるということにも、後ろ暗いところがあることを感じてしまうことがあるのだ。[hi,hi,hi]と笑う人間はそのことに気付いているかまたは少なくともそう感じていることは明らかである。この笑いは、次のような例文にふさわしい。

10) ひひひっ、騙されやがって！

11) Hi, hi, hi, wie dumm sind die! Wir haben die schlau betrogen!

(ヒッ、ヒッ、ヒッ、あいつら、なんてバカなんだ！うまいこと騙したぜ！)

またこの笑いを表現するドイツ語の動詞>>kicheln<<には、同じく[i]音、そしてこの母音の調音位置との対応で、硬口蓋で調音される無声硬口蓋摩擦音[ç]が現われる。この動詞の言語形式もまた、この笑いを構成する身体動作に動機づけられているのである。

#### 4.3. 心の喜びとしての分かり

##### 4.3.1. 分かり（理解）や分かりに伴う喜びを表現する

理解は私たちにとって喜びである。私たちは、分かりを喜び、この分かりの喜びを分かち合うことを喜ぶ。だからこそ、私たちは知恵を持つ動物である「ヒト」に進化したのである。[a:]のような開口低舌下降長母音が、前半部分にアクセントが置かれて発せられるとドイツ語に限らず多くの言語で、分かりの喜びを表す叫びになる。このことには私たちの身体的な共通性が基盤になっている、理由のあることなのだろう。

分かりの喜びは、素直な感動である。この感動は、穏やかに共有されればよく。ことさらに他者に伝えなくてはいけないものではない。そのためには、呼気は自然な勢いを持って滞りなく外に出ていけば良いのであって、口は素直に自然に開けられれば良い。この口腔の形が開口低舌なのである。発声は素直な強さを持って始まり、唐突に終わるのではなく自然に終わればよい。このために、下降調の長母音が適している。さらに下降調のメロディーは分かりによって認知ステータスが落ち着いたというメタファーとして働き得ることを私は、竹内 2014 で議論した。そのような理由で、日本語では、開口低舌短母音は驚きの叫びになってしまうし、開口低舌上昇長母音は、不信感や威圧感を持った疑いや脅しの叫びになってしまうのである。

だからこの>>ah<<という叫びは、以下のような分かりとそれに伴って喜びが示される文脈に似合っている。

12) Ah, das habe ich verstanden! (Frohes Lächeln zeigt der Sprecher)

(あー、分かりました！) (引き続いて幸せそうな微笑が示される)

##### 4.3.2. 他者に伝えたい分かりを表現する

分かりは喜びである。誰かに受け止められることが好ましく共有したい喜びもある。喜びの >ah< の最後に最小限のエネルギー投下で子音を付け加え、聞く人の注意を引こうとするなら、[x]音である。大開口低舌音の口蓋の構えから、開いた軟口蓋にわずかの緊張を与えるだけで、>ah< は >ach< になるが [x]音では大量の息が軟口蓋と摩擦を起こし、聞き手の注意を引くインパクトを持っている。

[x]音はすでにふれたように、ため息音であり、ことさらにたてられた息の音に私たちは「そば耳」を立てずにはいられない。この叫びは、以下のような文脈に適しているが、日本語には[x]音がなく、>ach<に対応する叫びもないため、対訳では適当にごまかした。

13a) Ach, wie schön ist das Kleid da!

(ねえねえ、まあ、なんてきれいなドレスなのかしら！)

分かりは基本的に喜びである。たとえ喜ばしくないことが分かったとしても、結果としては分からないよりはましなことが多いだろう。しかし、そのような分かりは瞬時に悲しみや落胆・絶望・非難に転換してしまう。このような文脈でも>ach<は発せられる。分かりから派生する落胆・絶望は他者に分ってもらい、それを共有してほしいこともある。非難は伝えなくてはならず、しかも、自分が事柄についての分かりを持った上で、非難の感情を抱えていることが相手に伝わらなくては、非難に実効力が伴わない。ここでの非難と分かりの結びつきはとても意味のあることなのである。

13b) Ach, was für ein freches habe ich ihr gesagt.

(まあ、なんて生意気なことを彼女に言ってしまったんだ。)

13c) Ach, Quatsch! Das ist Unsinn!

(バカなことを言うんじゃない、そんなんじゃだめだよ!)

#### 4.4. 驚きの感激を表現する

期待していなかった良さに出会ったときに、私たちはやはりうれしいし、その喜びを仲間と共有したくなる。[a]音と違って[o]音では、自然に口が開かれるのではなく、口の開け方が狭められる。このことで、叫び>>oh<< は叫び >>ah<< と違って、何らかの伝達意図が込められることになるのではないだろうか。その結果、中開口低舌下降長母音によって構成されている叫び >>oh<< は単なる喜びではなく、他者と共感したい喜びを表現するのに適している。

感激の気持ちは、一つの下降する長母音によって一つの滑らかな心の動きとして表現される。>>ach<< の場合のように息をこすらせることによって子音を介入させ、ことさらに他者の注意をひきつけることによる、感動のまとまり感が断ち切られることはないのである。>>oh<<は、以下の例のような、驚きの喜びを伝達的に表現するのに適している。

14) Oh, du hast das gut gezeichnet.

(オー、うまく描けたもんだね!)

### 5. 叫びから言語の誕生へ

#### 5.1. 訴えかけの前面化、積極的な訴えかけへの拡張

ドイツ語の痛みに対応する叫びは>>au<<とか>>aue<<、>>au, au, au<<、>>aue, aue<<である。また、>>Oh weh!<<とか>>es tut weh!<<などと言うこともある。

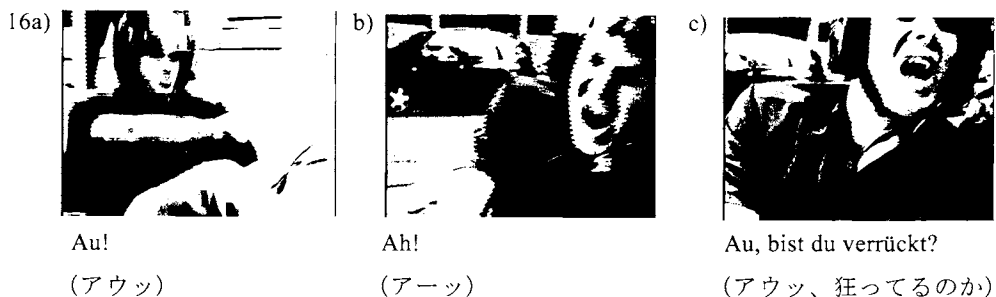
15) Aua, der Fuß tut weh!

(アウアッ、足が痛い!)

4.1.3.の「痛さから呻き・喘ぎへの音声化」の項で議論したように、この叫びの身体的な動機づけというのは、痛みの「耐え難い」情動を、大きく呼吸を排出することによって、外部に放出することと、そのような無防備な情動の露出を抑え込もうとすることにあるのだろう。

しかし、この表現が使われる場面をビデオ映像で探してみると、多くの例が痛さを受け止めて、衝撃を受けたり、嘆いたり、呻いたりしているものではない。どちらかという、自分が痛みを感じていることを他者に訴えかけているようである。>>Aua<<と叫ぶ人が、他者に訴えかけるように視線を投げかけることが、このような感じを引き起こすのだろう。

画像(16)は、外国語としてのドイツ語の教材(Treffpunkt Berlin, Deutsch Aktuell 1. 6th. Ed. Saint Paul, Minnesota: EMC Publishing)からのものであり、俳優の演技であるが、バイクの後部座席から落とされた若者が、(c)ではバイクを運転した若い女性の乱暴な運転を非難する発言をしている(Abs.10, Scene 48)。この画像に見られるように、>>au<<という叫びをする発言主体は聞き手に視線を向けているが、これは相手と視線を交わすことを求めているのだということが、動画をみると容易に解釈できる。



この動画では、(16c)の発話の前に、バイクから落ちた直後に、明らかに>>ah!<<という叫びをあげていて、画像に見られるように、男性は無防備に大きな口を開けて叫んでいる(16b)。この教材では、>>ah!<<という叫びは、無意識にそうになっているのだろうと私は推測するが、活字として印刷されておらず、印刷されているのは、(16c)の表現からである。ドイツ語は、痛みについての直接の叫びについては、積極的にそれを聞きなすことをしない言語のようなのである。すでに示唆してきたように、ドイツ語を話す人たちの集団は、無防備な姿勢・言動はこの言語社会では、できたら見なかった、聞かなかったことにして、触れないことにしている言語文化社会なのかもしれない。

動画からの画像を抜ったついでに触れておくが、バイクから落ちた瞬間の画像が(16a)である。この場面では、男性が、/a/音を発した後に、/u/の発音のために口をすぼめていて、それが痛みをこらえる緊張した表情と身体運動的に協調・共同関係にあることが見て取られる。

ところで、そもそもの話題に戻るが、(16c)では、視線が話しかけられる相手（聞き手）に向けられて、話し手は聞き手に働きかけている。そして、さらに、聞き手が精神の異常であるような言葉を投げかけ非難している。ここでの>>au!<<は明らかに、ただの「情動の自然発露」であるとは言えないように私は思う。「情動の自然発露」としての>>au!<<が他者への意図的な働きかけの性格に変貌を遂げているのである。このような意味で私は、ここでの>>au!<<について、叫びにおいて、訴えかけが前面化し、叫びが積極的な訴えかけに拡張した、叫びから言語の誕生への移行的事例である、という議論をしたいのである。

## 5.2. 様々にたち頭われる、叫びから言語への移行

4.3.2.項の「他者に伝えたい分かりを表現する」と4.4.項の「驚きの感激を表現する」の議論でも触れたのだが、分かりの>>ah<<に無声軟口蓋摩擦音/x/音が付け加わり>>ach<<という表現になるだけで「他者と分かりの喜びを共有したい」という意図が込められるようになる。>>ah<<の/a/音が口唇の形が丸められ、狭められ>>o<<音に変わり、>>oh<<という叫びになるだけで「分かりの『驚き』が表現に付加される」ようになる。これらの現象と同様に、>>ah<<に/u/という、口唇を丸め、狭める音が付け加わることによって、>>au<<はもはや驚きの>>ah<<とは異なる表現になり、痛みの訴えかけや加害者への非難に使われることが可能になる。

ソシュール以来の構造言語学を引き合いに出すまでもなく、人間の言語のひとつの側面は、音の様々な特徴を恣意的に組み合わせ、新しい表現を創りだせることである。しかし、叫びの言語化という現象を見ると、ヒトは叫びを基礎づける発声器官の構えを、情動の身体性という認知的動機に裏づけられながら変化させて、新しい表現を生み出してきた。動機づけられた形で発声における調音器官とその使い方を組み合わせることで、叫ぶ主体にも叫びを聞く主体にも分かりやすい形で、私たちの内的な経験である情動を外化する仕組みは、その可能性を拡張してきたようなのである。

>>ach<<や>>oh<<の説明のところではあえて触れなかったが、情動に対応した叫びのいたるところで、このような、直接的な情動の発露から、意図的に訴えかける意味での表現の『進化』が起きているのではないだろうか。別の言い方をすれば、直接的な叫びに潜んでいた、「他者への訴えかけが前面化し、意志を伴うこともありながら自分の内面を記号化する言語の誕生」というものが、情動＝内的経験の発露としての叫びのいろいろな局面に観察できるのである。

このようなことが可能なのは、叫びというものが、すでに述べたように、そもそもは、私たちの内的経験を他者が見ることができるようにすることによって、共感、共感に基づく相互扶助、または威嚇や攻撃、社会関係の確立に役立つからこそ、進化してきたということと関係しているのに違いない。

霊長類の研究で知られているように、ヒト以外の動物も嘘をつく。チンパンジーの弱者

である個体には、自分の庇護者の近くで嘘の叫びをあげて、庇護者に他者を退けてもらうという行動が観察されるという。他者の攻撃を受けた、チンパンジーの個体が恐怖の叫び声をあげて、たまたま近くにいた庇護者に他者を退けてもらうという助けを受け取る経験をするということが時々はあるのだろう。そのような経験から、嘘の叫びをあげて、庇護者に他者を退けてもらうということまでの飛躍は大きなものであるかもしれない。しかし、ほんの一跳びの変化なのかもしれない。動物の社会でも、ヒトの子供たちの成長の過程でも、また大人の世界でも、このようなことは日々起こっていることなのに違いはない。

### 5.3. 発声の調整による意味の調整

音の組み合わせを変えることによって、認知的な動機づけを伴って新しい記号連鎖を作り出すことは、すでに確立した言語表現についても起きている。2000 年代初頭から（もっと昔にさかのぼれるのかもしれない）、例えば放送局 NHK の専門職であるアナウンサーという人たちが、朝のニュースというか、朝のヴァラエティー番組のようなものの司会をしながら、これまでだったら「ヘーッ！」と相槌を打つところを、[e]の音を[a]のように両唇を丸めて[hø:]のような音声連鎖で相槌を打つことに気が付いている方もいるかもしれない。

「ヘーッ！」という相槌は、相手の発言に対して、「それは意外だ」とか、「思いもよらなかった」、というような純粋な驚きを表わすものであった。

17a) 花子さんは生け花の先生の資格を持っているんだよ。

ヘーッ！すごいんだね。

b) 花子さんは生け花の先生の資格を持っているんだよ。

[hø:]！見かけによらないもんだね。（そんな偉い人にはみえないけどね...）

例文を読むと日本語の話者は理解できると思うのだが、(17b)の例では、[e]の音を、両唇をまるめて、こもらせた音にすることによって、表現されるのが素直な驚きではなく、保留付の驚きであることが分かるようになっている。単純な驚きは「単純」だから、[e]の音をこもらせずに、素直に身体の外に出せばよい。しかし、保留付の驚きは、「保留付」だから、どこかで停滞させながら身体の外に出さなくてはならないのである。

似たようなことが、ドイツ語では、>>ach<<を>>och<<に変形させることで起きている。以下は、先にあげた、外国語としてのドイツ語の教材(Treffpunkt Berlin, Deutsch Aktuell 1. 6th. Ed. Saint Paul, Minnesota: EMC Publishing) からのものであるが、ギムナジウムに通う少年 Christian が友人 Hasan に対して、お母さんはいつも Hasan の帰宅が遅いことに小言を言うだろうとからかっている。それに対して、Hasan は、そんなことは言わないと反論しているのであるが、おそらくは、Hasan の母親は息子に対して毎晩そのような小言を言っているのであり、友人 Chirstian もそのことはよく知っているのである。少年 Hasan はただ面子

を保つためにだけ、友人のからかいに反論しているのである。

だから、ここでは、反論に添えられる驚きの感嘆表現は、素直に>>Ach!<<とはならず、>>Och!<<と口ごもるのである。>>Ach!<<と素直に呼気を効率よく排出し、それに対応する[a]音を使えばよいようなものなのに、両唇を丸め、口腔に響かせることにより、やはり、この感嘆には留保があることが示されている。実際は母親はそんなことを言うのである。しかし体面上 Hasan は友人に対しては、この嘘が見抜かれることは承知の上で、「そんなことは言わない」と言わざるを得ない。

18) Christian: Frau Özlan sagt immer: Hasan Junge, du kommst immer so spät!

(クリスチアン：エツランおばさんはいつも、  
坊や、ハッサン、いつも遅いわね、と言うだろう。)

Hasan: Och, das sagt sie nicht.

(オッホ！そんなことは言わないよ（言うけどさー...））。

>>igitt<<という叫びは>>Oh, Gott!（おお、神よ！）<<の変形だそうで、吐き気や罵りの表現である。そもそもドイツ語では>>Oh, Gott<<という表現が、日本語に翻訳しようとすると「糞っ！」とか、「忌々しいっ！」としなければいけない場合が多い。>>Oh, Gott<<は、昔から神への祈りから逸脱して、罵りや呪いの言葉になっている。この>>Oh, Gott<<の[o]の音が[i]の音に入れ替わって、吐き気や罵り、呪いの性格がより明確になっていると考えられる。

音の組み合わせという意味では、単なる恣意的な記号連鎖が一つ増やされたというような解釈も可能なかもしれない。しかし、ここはそうではない。4.1.2の「吐き気・むかつきの音声化」の項、および、4.2.2.1の「不快さに対して怒る」の項で議論したが、>>ih!<<は、そもそもは吐き気をこらえ、吐き気を催させるものに嫌悪感を示す、強い表現なのである。[o]の音がこの音に置き換えられることで、>>igitt<<という叫びは、>>Oh, Gott!<<から身体的・認知的に動機づけられて、「嫌だ！」という感情がより強く込められた情動の表現に拡張しているのである。

この拡張によって、怒りや呪いという性格付けが定着して久しい>>Oh, Gott!（おお、神よ！）<<の表現は、さらにこの情動のより激しい発露となっている。それは単に記号列が恣意的に変化して、新しい記号が創出されたのではなく、身体的に動機づけられたふさわしい音との組み合わせによって、より効果的な記号が創出されたのである。似たようなことが>>Oje (←Oh, Jesus)<<とか、>>Ojemine (←Oh, Jesus mein)<<のような表現でも起きていると思われるが、ここでは説明を省略する。



## 6. 結論

内的体験である情動は、それが身体の外面や外部空間に露出されることによって、他者から「覗ける」ようになる。そのことが社会的生物として進化した私たちヒトにとってとりわけ重要な役割を果たしてきた。このことは、ヒトの表情や身体表現というものが非常に豊かなものに進化しているということからもよく理解できることである。

この内的体験である情動は、表情や身体表現としてだけではなく、音声表現としても身体的に動機づけられ、外化され、他者に聞かれるようになっていく。私たちヒトは動物としてそのように進化してきたのである。

本論では、日本語との比較を交えながら、ドイツ語の叫びについて議論してきた。ここでの議論は、さらに様々な言語における事象の検討、より広範な、ヒトの進化をめぐる諸科学の研究成果を踏まえて検討をかさねていかななくてはならない。しかし、ここでは、以下に、議論の筋道をもう一度整理して、いったんこの論考をしめくくりにすることにする。

- I 感覚と関係する痛みや寒さなど、内的経験としての情動が外化する「叫び」は身体的・認知的に動機づけられ、「聞きなし」が可能な固定表現として成立してきた。
- II 情動の外化としての「叫び」は、単なる情動の外化・可聴化としてだけではなく、他者への訴えかけの性質を獲得してきた。叫びが訴えかけの性質を持つためには、特に、社会的動物としての、他者についての分かり（心の理論）を基盤にした、相互行為の能力が豊かになっていることが必要だったのだろう。
- III 喜びや悲しみなどの、感覚であるというよりも心の働きにより近いと言える情動もまた、感覚的な情動が音声によって外化できる能力を基盤に、身体的・認知的に動機づけられて表現できるようになってきたのだろうと考えられる。
- IV 心により近い情動は、さらに、身体的に動機づけられた発声特徴などと組み合わせられることによって、複雑な意味合いを備えた表現に進化した。このことが可能なのは、自己の情動を、他者との関係においてどのような意味・価値を持つのかという観点から、対象化してとらえることができるからである。表現を特徴の組み合わせによって拡張すること、そして、自己の情動を対象化してとらえることができるようになってきたという点で、このような表現の拡張は、ヒトの言語を成り立たせる萌芽の一つとしてとらえられるのではないだろうか。
- V 情動の外化に訴えかけの要素が加わると、叫びはさらに私たちヒトの言語を言語としている性格の一つ、意図性を帯びることになる。私たちヒトの言語の大きな特長の一つは、相互に伝達を意図し、さらにその意図を理解することで分かりあいを成立させることにあるのである。
- VI IからVまで、順番に整理すると、感覚的な情動の単純な外化としての叫びが、現

在のヒトの言語により近い性格を帯びるまでに、それぞれの段階を非連続的に積み重ねているように誤解されそうである。しかし、この論考の議論を具体的に追いかけていただいた読者には理解していただけたと思うが、これらの言語進化は連続的に、様々な過程が入り混じって成り立っているのだろう。なぜならば、これらの過程は、私たちが社会的動物としてより高い生存の可能性を実現するために、様々な形で同時進行的に実現するのが自然だと考えられるものなのだからである。

## <参考文献>

- Billig, Michael 2005: *Laughter and Ridicule: toward a social critique of humour*. London: Sage. (マイケル・ビリッグ:『笑いと嘲り——ユーモアのダークサイド』、新曜社、2011)
- Chomsky, Noam 1957: *Syntactic Structures*. The Hague: Mouton. (ノーム・チョムスキー:『文法の構造』、研究社出版、1963)
- 1965: *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge: The MIT Press. (ノーム・チョムスキー:『文法理論の諸相』、研究社出版、1970)
- Darwin, Charles Robert 1859: *On the Origin of Species by Means of Natural Selection, or the Preservation of Favoured Races in the Struggle for Life*. (ダーウィン:『種の起源、上・下』、光文社、2009)
- 1872: *The Expression of the Emotions in Man and Animals*. London: John Murray. (ダーウィン:『人及び動物の表情について』、岩波文庫、1991/2001)
- de Waal, Frans 1996: *Good Natured: The Origins of Right and Wrong in Humans and Other Animals*. Cambridge: Harvard University Press.
- 2005: *Our Inner Ape*. New York: Riverhead Books. (フランス・ドゥ・ヴァール:『あなたのなかのサル—霊長類学者が明かす「人間らしさ」の起源』、早川書房、2005)
- 2009: *The Age of Empathy: Nature's Lessons for a Kinder Society*. New York: Broadway Books. (『共感の時代—動物行動学が教えてくれること』、紀伊國屋書店、2010)
- Kraft, Wolfgang S. 2010: *Treffpunkt Berlin. Deutsch Aktuell 1. 6th. Ed.* Saint Paul, Minnesota: EMC Publishing.
- Lakoff, George and Johnson, Mark 1999: *Philosophy in the Flesh: the Embodied Mind and its Challenge to Western Thought*. Basic Books, (ジョージ・レイコフとマーク・ジョンソン『肉中の哲学—身体を具有したマインドが西洋の思考に挑戦する』哲学書房、2004)
- Masson, Jeffrey Moussaieff & McCarthy, Susan 1996: *When Elephants Weep: The Emotional Life of Animals*. (J.M.マッソン&S.マッカーシー:『ゾウがすすり泣くとき—動物たちの豊かな感情世界』、河出書房新社、2010)

竹内義晴 2012 : 「恨み」がドイツ語に翻訳できない! ——翻訳の問題を通じて, ドイツ語と日本語について, そしてことばについて何が分かってくるのか、竹内義晴編、『翻訳という問題から見えてくる言語, 文化, 人間』、日本独文学会研究叢書 85、40-56、2012

--- 2014 : Die Satzmelodie zur Abgrenzung der Kognitionseinheiten – am Beispiel der restriktiven und nicht restriktiven Relativsatzkonstruktionen – (文メロディーの認知単位を境界づける機能 —ドイツ語の制限的、非制限的關係文を例に)、『金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇、第6号』、1-23

和田美代子 2012 : 『声のなんでも小事典—発声のメカニズムから声の健康まで』、講談社ブルーバックス 1761